

神戸人間の  
変貌



山本篤子氏



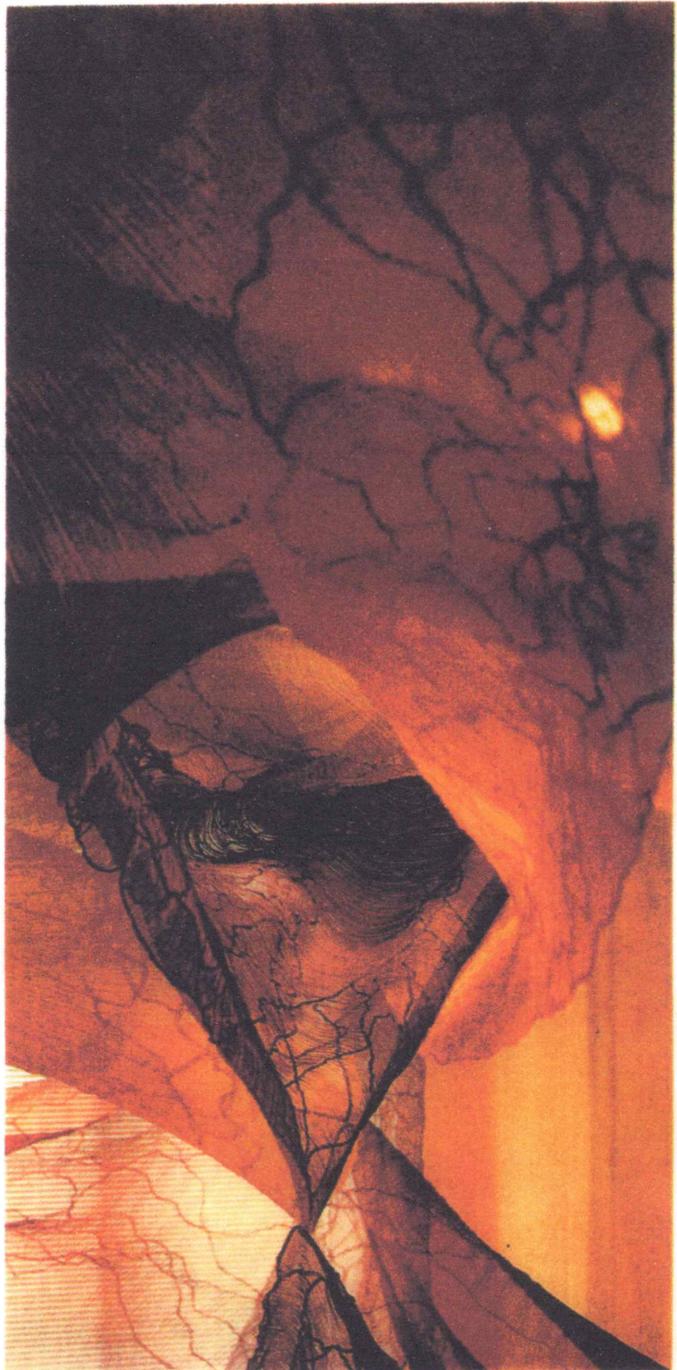
山本篤子

石：HIROSI MIKAMI  
DRESS：MASARU AMANO  
PHOTO：FUMIHIKO ITO

山本篤子さんは、神戸人間像の一典型とはいえないだろうか。芦屋生まれ。祖父は高級子供服を手掛け、祖父の姉はフランス人高官と結婚し、神戸で貿易商を営んだ。そうした環境の中で篤子さんは、子供の頃から舶来雑貨や洋書に囲まれて育った。洋風の刺繍は、彼女の母が混血の従兄弟から学んだ技術の母子相伝、日本刺繍の勉強に加えて、幼い頃から東西刺繍に親しみ、洋画も趣味のお稽古事だった。

甲南女子大文学部を卒業してロンドンに留学、ゴールドスミス・カレッジの大学院に学び、テキスタイルとエンブroidアリーを専攻した。時はサッチャー首相によるエデュケーション・カットの寸前、創造を目指す自由なカレッジライフはまだ健在だった。しかも小さな芸大だったところから、ジャンルを超えた交流も自然に行われ、芸術潮流にさおさす広い視野から、テキスタイルや刺繍を見定めることもできた。

英国はもともとヨーロッパ工芸の最強拠点。なかでもテキスタイルの社会的な地位は高く、19世紀の伝統を守るニードル・スクールの方も強い。ここから芸大の刺繍は、伝統と一線を画して、刺繍の装飾要素である織の要素を捨てて刺に徹し、エンブroidアリーではなくステッチド・テキスタイルをめざす、急進的な作風が支配的になっていった。このなかで古典的な西欧趣味の芦屋のお嬢様か、現代的なステッチド・テキスタイル表現のバイオニアに変身する。これまた現代神戸の新人人間像ではないか。



ATSUKO YAMAMOTO 個展より 上糸と下糸の調子を狂わせた12mmのジグザグ・ミシンをシルク・オーガンジーにステッチ後、煮沸し、糸の収縮によりギャザーを出した素材群